

混声合唱とピアノのための「くちびるに歌を」

指揮： 山中 緑
ピアノ：石井 京子

第2ステージでは、信長貴富作曲、混声合唱とピアノのための「くちびるに歌を」を演奏いたします。いわずと知れた名曲で、特に終曲「くちびるに歌を」は演奏会などで広く親しまれています。各曲のテキストはドイツ語の詩とその日本語訳の2言語で構成され、情景が立体的に描かれます。

1. 白い雲

ピアノのアルペジオが広い空を思わせるさわやかな曲です。白い雲は美しく、儚く漂います。青い空に白い雲という明るいイメージが強いですが、白い雲はただ底抜けに明るいのではないのです。曲の中間部にはその陰りの部分が見られます。「さすらいの悲しみと喜びを味わいつくしたものでなければ、あの雲の心はわからない。」どんな時でも自分を受け入れてくれているような、そんな白い雲に思いを馳せます。

2. わすれなぐさ

不安や恐怖を感じさせるようなピアノから始まり、ドイツ語での感情の高まりを経て、波の揺らぎの中間部へ移行します。ワスレナグサはムラサキ科の青い花の植物ですが、ドイツ語ではVergißmeinnichtといます。これは、私を忘れないでという意味で、背景には中世ドイツの悲しい伝説があります。

ある日、ドナウ川の岸を散歩していた騎士ルドルフとその恋人ベルタが、青く美しい花を見つけました。ルドルフはベルタのためにその花を摘もうと手を伸ばしますが、足を滑らせて川に流されてしまいます。命の危険を悟ったルドルフは、最後の力を振り絞って花を岸に投げ、「Vergiß-mein-nicht!」（僕を忘れないで!）という言葉

を残して川底に姿を消しました。

美しい青の色、そして深い悲しみに心が揺さぶられません。

3. 秋

鋭いリズムで葉が落ちる様子が描かれます。何もかもが枯れてしまうように。手で否定の身振りをするように。そして孤独へ落ちるように。すべてが落ちる。寒く、希望が持てなくなり、激しい悲しみに駆られ、発狂してしまいそうな、いや、もうしているのかもしれない。そんな中で、たった一人落下を両手で支える者の登場により訪れるカタルシス。しかしそれでもなお落ち続ける。

普段はあまり気に留めることのない葉の落ちる様子ですが、詩を書いたリルケの目には絶望を加速させるように見えたのかもしれない。

4. くちびるに歌を

演奏会のレパートリーやアンコールとして歌われることの多い終曲。落ち込んでしまった時でも、前向きな気分になり、歌いだしたくなるような気持ちにさせられます。詩の原題は“Hab’ Sonne im Herzen”（心に太陽を持って）ですが、本曲はその2連目に付曲され、日本語訳は作曲者自身によるものであり、曲名を「くちびるに歌を—Hab’ ein Lied auf den Lippen—」としています。全曲を通して作曲者が詩から受けたインスピレーションをもとにテキストが自由に構成されていますが、本曲はその特徴が特に顕著に表れています。言葉では表現できない感情の高ぶり、エネルギーの高まりを強く感じる作品です。

山中緑

学生指揮者

山中 緑

文学部地理学科4年。指揮を高坂徹氏に師事。

小学4年生で合唱を始める。高校在学中にソプラノパートリーダーを務める。全日本合唱コンクール全国大会金賞受賞ほか、多数の演奏会に出演する。現在では、法政大学アカデミー合唱団で学生指揮者を務めるかたわら、学外の合唱団体にも複数所属し見識を広めている。確かな技術・知識とチャーミングな人柄で、合唱経験の有無を問わず団員からの信頼が篤い。

第2ステージ「混声合唱とピアノのためのくちびるに歌を」のように複数言語のテキストからなる曲集は、彼女にとって法政大学アカデミー合唱団学生指揮者としては初めての試みとなる。山中の新境地にご注目いただきたい。

Sunrise Mass

指揮：小久保 大輔
弦楽：アンサンブル・ミュージズ

ノルウェーの作曲家オーラ・イエイロの「サンライズ・ミサ」は、伝統的な礼拝の要素と現代的な音楽表現を融合した合唱作品です。この作品は弦楽オーケストラを伴い、イエイロの特徴である豊かなハーモニーと様々なテクスチャにより、繊細な瞬間から豊かなオーケストレーションまで幅広く展開されます。伝統的な宗教儀式であるミサの形式(テキスト)を用いつつも、作曲家はそれを意識の在り方を辿る普遍的な素材として捉え直し、不確かに思える空間的な領域から地に足のついた実感へと進む、多様な感情的風景を描く音楽として表出しました。

テキストとして用いられている「ミサ通常文」とは、カトリック教会のミサ(礼拝式)において日付や祝祭にかかわらず常に用いられるラテン語の文で、多くの作曲家が独自の音楽的解釈を加えて作品を遺してきました。大まかな構成は以下の通りです。

キリエ (Kyrie)

「主よ、憐れみたまえ」(Kyrie eleison)というギリシャ語のフレーズを繰り返し、罪の赦しを求め、キリスト教の基本的な懺悔の思いを表す。

グロリア (Gloria)

神の栄光を讃え、地上の平和を願い、神の偉大さと慈悲に感謝する。

クレド (Credo)

ミサの中心となる信仰宣言。カトリックの基本的な信仰内容が述べられ、三位一体の神、イエス・キリストの生涯、そして永遠の命への信仰などが宣言される。

サンクトゥス (Sanctus)

全能の神の聖さと力を讃える部分で、天使たちが神の栄光を称賛する様子を表す。

ベネディクトゥス (Benedictus)

キリストが神の子として来られたことを讃える。

アニュス・デイ (Agnus Dei)

「世の罪を取り除く神の小羊」すなわちキリストが人類の罪のために犠牲になったこと、そしてその犠牲による救済と憐れみ、そして平和を求める祈り。

イエイロは「サンライズ・ミサ」において「ミサ通常文」をそのまま使用しつつ独特な宇宙的世界観を持った4つの楽章を作曲しました。

1. The Spheres (Kyrie)

2群の合唱により空間的な広がり存在の神秘が表現され、美しさと痛み、瞑想と静寂を表出します。漂う和声は圧縮され切々とした旋律へと変化していきませんが、ここで用いられている4つのジグザグな進行(E \flat -C-D-B \flat)はバロック期における十字架音型を想起させるものです。

2. Sunrise (Gloria)

前曲の静けさから移行し、よりダイナミックで明るいエネルギーが導入されます。曲名の通り新たな日の光と活力を体現するような音楽は喜びと興奮に満ち、偉大な存在と対峙する衝撃が相対化された自己の認識へと結ばれます。強さを得た落ち着きへと音楽は移行し、バイオリンが深い瞑想へと導きます。

3. The City (Credo)

都市生活の複雑さを感じさせる弦楽器によるオスティナートが圧迫する中、自己は真実を探求し彷徨います。キリストの生涯を語るセクションではアルトがグレゴリオ聖歌を模し、受難の場面では「The Spheres」の十字架音型が再現されます。復活の言葉を経て、音楽は再び都市の喧騒へ戻りますが、統合された自己は新たな生活の在り方を力強く宣言します。

4. Identity (Sanctus, Benedictus, Agnus Dei)

解決と平和をもたらす終曲は「The Spheres」と同様に始まり、自己と世界との合一が果たされます。感情的な旅を経てたどり着いた安定は讃美歌の形をとって表現され、「われらに平和を与えたまえ(Dona nobis pacem)」と静かにとじられます。

伝統的なミサ通常文を用いつつそこにある普遍性を掘り上げ霊的な旅を表現した「サンライズ・ミサ」。ここで描かれるエーテリアルなものから地に足のついたものへの変化は、人間の成長や霊的な悟りの反映であると共に、作曲家がミサから受けたインスピレーションを多様な手法でリアライズしていく過程そのものの追体験であるかもしれません。

形式化された伝統に囚われるのみならずそこにある普遍を抽出し、現代に則した実践として再生産する。若者たちが歌うこの作品が、(精神探求や歴史背景への理解を持つのは当然として)宗教音楽ではなく自分自身の歌として響き渡ることを願ってやみません。

弦楽

アンサンブル・ミュージズ

ヴァイオリンⅠ	丹羽 道子/山本 真希子
ヴァイオリンⅡ	氏家 千佳/村上 知佐子
ヴィオラ	栗山 幸子/栗山 純
チェロ	児玉 千佳/白神 あき絵
コントラバス	三好 美和

「音楽を、より身近なものに」との願いをこめて、故横溝亮一氏(音楽評論家)の呼び掛けにより、東京藝術大学の卒業生で結成された。

弦楽合奏を中心として、レパートリーは、クラシックからポピュラー、童謡まで、幅広く、全国各地のホール、街のイベント会場、学校での芸術鑑賞会、地方の音楽祭への出演など、幅広い演奏活動を行っている。



音楽監督・指揮者

小久保 大輔

1998年東京音楽大学器楽科卒業。指揮を桐田正章、汐澤安彦の各氏に、トランペットを林昭世氏に師事。2001年、横浜カントーレ公演オペラ「毒か薬か物語」「俊真」を指揮。2009年より劇団四季において「ウェストサイド物語」「サウンド・オブ・ミュージック」「オペラ座の怪人」を指揮。

現在、マルチナショナルフラスアンサンブル、法政大学アカデミー合唱団各音楽監督。横浜ルミナス・コール、ラスベート交響楽団、各常任指揮者。鎌ヶ谷フィルハーモニック管弦楽団、東京農業大学全学応援団吹奏楽部、藤沢福音コール、村上正治記念ちばマスターズオーケストラ、女声合唱ふじ各指揮者。DOBS2020技術顧問。学習院OB合唱団顧問。

法政大学アカデミー合唱団の皆様、第62回定期演奏会のご開催心よりお祝い申し上げます。

「明けた」という言葉と共に「以前」を取り戻す動きが世間にも多く見られた本年。アカデミーにおいても年中行事がほぼ復活し、9月には2019年以来4年ぶりとなる蔵王での夏合宿が行われました。今年の4年生(62期)は2020年入学のため参加メンバーの全てが初となる蔵王合宿でしたが、過去の記録を紐解き、往年を知るOBのご助言・ご助力を得ながら充実した時間を過ごすことができました。合宿のみならずあらゆるイベントにおいて伝統と向き合うこととなったこの一年は、「以前」を知らない彼らにとっては新たな挑戦の連続だったのではないかと思います。

62期が入学した2020年の第59回定期演奏会は無観客開催、アカペラのみで40分ほどのプログラムでした。対面練習は時間や場所の制限があり充分確保できなかったため、オンライン練習でできることを工夫しながら準備を進めました。本番の状況もマスク着用で距離を取りながらの演奏で、必ずしも快適なものではありませんでした。しかしながら、当時の現役メンバーから発せられた「ころようたえ」という言葉と音楽は、透き通る叫びとなって無人の客席に響き渡り、今でも忘れ得ぬ永遠の歌となったのです。

「以後」を4年間駆け抜けた62期。その時間は過去を取り戻すだけではなく、未来へ進むための重要な軌跡でした。「以後」だから理解できたこと、発見できたことのひとつの到達点として、今夜の演奏会がアカデミーの長い歴史に新たな一ページを刻むことを心から楽しみにしています。

最後になりましたが、本日まで活動を支えて頂いた西田部長はじめ大学関係の皆様、温かく見守ってくださるOB・OGの皆様、ホイストレーナーの小貫先生、武藤先生、ピアニストの石井先生、共演くださったアンサンブル・ミュージズの皆様へ深く御礼申し上げます。



ヴォイストレーナー

小貫 岩夫

同志社大学卒業後、大阪音楽大学卒業。

同志社時代は同志社グリークラブに所属。

95年「魔笛」タミーノ役に抜擢され、テオ・アダムと共演デビュー。翌年、ケムニッツ市立歌劇場(ドイツ)に同役で招聘出演した。

文化庁オペラ研修所第11期修了。文化庁派遣でミラノへ留学。

合唱団の指導者としては法政アカデミーの他、関西学院グリークラブ、慶應義塾ワグネル・ソサエティ男声合唱団、立教大学グリークラブ男声、同志社グリークラブ、県立川越高校音楽部、東京アカデミー合唱団、しなの合唱団、男声合唱団フロイデなどのヴォイストレーナー、また大阪外国語大学グリークラブOB(東京)、立教女学院高校聖歌隊の指揮者として活躍している。

二期会会員。東京藝術大学オペラ専攻非常勤講師。二期会オペラ研修所講師。

第62回定期演奏会の開催、おめでとうございます。今年はアーリーサマーコンサートを初めて聴かせてもらいました。またOB合唱団のステージではソロもさせて頂き、大変思い出深いものとなりました。一方、現役の方々とは接点が薄く、何となく物足りないまま年の瀬となってしまいました。挨拶文を書こうにも、ほとんどネタがないのです。ただ言えるのは、コロナ元年に入部した4年生。大変な中、入部してくれて有難う。あなた達が入ってくれたおかげで、今年も定期演奏会ができるのです。お疲れ様でした。来年はもう少し関わりたいと思うこの頃です。良い歌を待ち望んでおります。



ピアニスト

石井 京子

国立音楽大学器楽科ピアノ専攻卒業。ピアノを山田千代子、伯田昭子、Einar Røttingen、伴奏法をTurid Bakkeの各氏に師事。ノルウェー王立ベルゲン大学グリークアカデミーへ留学し、エドヴァルド・グリーク博物館コンサートホールにてリサイタルを開催。同アカデミーのインターナショナル・ディプロマコースを学ぶ。モーツァルトウム夏期国際音楽アカデミー、ハラルド・セーヴェラー室内楽音楽祭等に参加。

法政大学アカデミー合唱団の皆様、第62回定期演奏会のご開催、誠にありがとうございます。

4年学生指揮者の山中緑さんと初めて演奏させていただいたのは昨年のアーリーサマーコンサートになります。社会情勢に伴い日常生活や合唱活動が一変してしまっても、アカデミーの皆さんは諦めることなく練習を積み重ね、ホールに響き渡る素晴らしい歌声に何度も感動を頂きました。本日『くちびるに歌を』伴奏を務めさせていただき、再び舞台で一緒できることを嬉しく思います。

山中さんの柔和な雰囲気と芯にある情熱、豊富な知識経験を活かした曲づくり、理想の演奏に向けて、一つひとつ的確な指示のもと一步一步着実に近づいていく皆さんの歌声、深く印象に残っています。これまで培ってきた経験が情感豊かな作品を歌い上げるための力となってくれることと思います。励んできた練習が結実する日の一助になりますよう、心を込めて伴奏させていただきます。



ヴォイストレーナー

武藤 直美

東邦音楽大学及びドイツ国立デュッセルドルフ・ロベルト・シューマン音楽大学オペラ科卒業。第60回読売新人演奏会出演。1999年よりドイツラインオペラにてメンデルスゾーン「真夏の夜の夢」妖精役、デュッセルドルフセントアントニウス教会とソリスト契約。7年間のドイツ滞在中、日本国内でもドイツ大使館後援によるコンサートに出演。帰国後も多くのコンサートやオペラに出演。2023年9月ドイツのボンにてリサイタル。

現在、東邦音楽大学准教授。法政大学アカデミー合唱団ヴォイストレーナー。2022年国際声楽コンクール東京審査員。日本演奏連盟会員。

法政大学アカデミー合唱団、第62回定期演奏会のご開催、誠にありがとうございます。

第1ステージは「木下牧子 アカペラコーラスステージ」より4曲を3年生の村瀬真秀子さんの指揮、第2ステージは4年生山中緑さんの指揮と石井京子先生のピアノで信長貴富氏の混声合唱とピアノのための組曲「くちびるに歌を」をお贈りいたします。この2ステージでの楽曲は過去にも演奏されており、大変思い入れ深く、今回皆さんがどのように歌ってくださるのか楽しみでもあります。そして音楽監督であります小久保大輔先生指揮による第3ステージは「Sunrise Mass」、アンサンブル・ミュージアムさんとの共演は普段とは違う感動があること確信しております。アカデミーの皆さんの色々な想いを胸に、各ステージ、素晴らしい演奏となりますよう、心よりお祈り申し上げます。